

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530595

研究課題名(和文) 日本型自助組織「断酒会」による社会啓発活動の変遷 薬物乱用対策から自殺予防へ

研究課題名(英文) On the Transformation of Danshukai, a Self-help Group in Japan

研究代表者

眞崎 睦子 (Masaki, Mutsuko)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：40374631

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：自助組織(自助グループ、self help group)とは、共通の問題を抱える個人及びその家族が自らの意思で参加し、「言いつ放し・聞きつ放し」という特徴的なコミュニケーションにより問題の解決あるいは緩和をはかる団体である。1930年代にアメリカのアルコール依存症者の中で始まり、欧米を中心に様々な問題を抱える当事者たちの間で形成されるようになった。本研究では、日本型の自助組織として発展をとげてきた「断酒会」の社会啓発活動のあり方及びその変遷を探る。

研究成果の概要(英文)： Many in the U.S. and Europe are aware of the self-help group Alcoholics Anonymous (AA). AA, a mutual aid movement which anyone who wishes to stop drinking can join, is organized and managed by its members. Its history began when it was founded by two alcoholics in the U.S. in 1935. As the name of this group suggests, the members remain anonymous, particularly in public media. Responding to AA's program and tradition, a great variety of spinoff self-help groups for alcoholics and their family members have appeared in different cultures, each of them having developed in accordance with their respective social systems. Danshukai is one of these, which has developed in Japan. The remarkable and definitive difference is that Danshukai abandoned anonymity deliberately. In this project, the transformation of its role is explored in the context of Japanese society, which faces social problems such as the increased risk of suicides, and weakening local community networks.

研究分野：社会学、教育社会学、教育人類学

キーワード：社会集団 自助組織 自殺 アルコール依存症 日本 断酒会 アルコール・薬物乱用 gateway drug

1. 研究開始当初の背景

2011年3月、日本社会は東日本大震災という未曾有の大災害にみまわれた。被災者の避難生活が長期化する中、飲酒によるトラブルが増えている。また、仮設住宅入居後の入居者の孤立により生じる諸問題が懸念されている。理由の一つとして、阪神・淡路大震災後に注目された**孤独死**があげられる。その死因の三割が大量飲酒による肝硬変だったことはあまり知られていない。このような問題等を未然に防ごうという声をあげているのが日本各地で組織されている**断酒会**である。

断酒会は1960年代に組織されて以来、アルコール依存症者の回復を支援し、問題飲酒を「酒害」と呼び、これを未然に防ぐための社会啓発活動を行ってきた(飲酒運転撲滅キャンペーン等)。現在は全国に1万弱の会員がいる。このような活動に新たに加わったのが「自殺予防」の観点である。このような断酒会による社会啓発活動についての研究を開始するに至った経緯は以下のとおりである。

研究代表者は、日本とアメリカをフィールドに、過去にあった移民教育、異文化間教育のあり方について教育学及び社会人類学的アプローチによる事例研究を重ねてきた。分析の手がかりとしてきたのは**教育メディア**(教育リーフレット類)である。その過程において、日本とアメリカにおける「薬物教育」中でも、「アルコール関連問題に関する教育」の教育形態(当事者らによる**自助組織における直接的及び間接的相互教育など**)について着目し、資料収集・成果発表の場を、日本、英国、北米に広げるなどして、予備研究を開始したのは1999年である。

ゲートウェイドラッグ(入門薬物、他の薬物使用の入り口となる薬物)の代表格は酒とたばこである。入手が比較的容易で、

合法という点では、同様の扱いを受けてよいはずだが、日本社会における、この二つの入門薬物に対する受けとめ方は大きく異なる。研究代表者は「酒」という薬物に影響を受ける人間と社会に注目し、「社会全体の飲酒へのあいまいな姿勢が薬物乱用につながっている」と発信してきた(『若者と薬物:飲酒に甘い社会が入り口に』朝日新聞<私の視点>2009年5月1日、等)。

2. 研究の目的

これまで飲酒・アルコール関連問題についての教育及び研究は、医学的見地からなされることが一般的であった。最近では世界保健機関(WHO)が提唱する**ライフスキル(Life Skills)**概念のもと、教育学の視点からの研究成果も登場している。それらの多くは、学齢期児童、青少年を対象にした一時的・短期的な教育期間を想定したものが中心であり、青年期・壮年期以降へとつながる長期的視座による教育モデルの開発及び研究の蓄積は決して十分ではない。

研究代表者は2002年から**無記名アンケート「飲酒に関する大学生の意識調査」**を行っているが、その成果を試験的に国外で発表したところ(Learning Conference 2003、ロンドン大学)、「(研究代表者の調査では)**半数以上の大学生が、酒が薬物であることを認識していない**」、「**アルコール依存症者らによる自助組織について知るものがほとんどいない**」という調査結果に驚きの声があがった。このことも本研究課題に取り組みきっかけとなった。

青年期以降、飲酒についての問題を抱える人々が、上に述べた「**自助組織**」にたどり着くまで平均7.3年の時を要するというのも、長期的な飲酒関連問題についての教育及び情報提供を受ける機会がほとん

どない日本国内の実情を表すものである。この数字は東京断酒新生会の調査によるものであるが、調査対象が東京在住で自助組織に通っている方々であることを考えると、調査によってはそれ以上の時間がかかっていることが明らかになるものと仮定できる。

その後の研究代表者の調査でも「自助組織について聞いたことがない」と答える大学生の数は常に90%を超える。このように知名度の低い自助組織とは何か、日本型自助組織である断酒会を中心に、その活動内容及びその変遷について探り、広く社会に発信することによりその意義を問いたいと考える。

3. 研究の方法

日本国内では、北海道（旭川市、札幌市）、宮城県（仙台市）、大分県（大分市）、長崎県（五島市）の各地を訪ね、資料収集・アンケート調査・インタビューを行い分析を加えた。このうち、宮城県仙台市には、東北各県のみなさまが集まる宮城県断酒会によるセミナーにおいて震災後の地域社会と断酒会との関わりについてお話をきかせていただいた。並行して講義「社会問題としての飲酒」を開講し、大学生を対象に日本型自助組織についての認知度等について調査を行った。国外では北米の自助組織を訪ね、研究代表者が日本型とする自助組織との相違点等を探った。

4. 研究成果

研究の過程で、明らかになったことの一つに日本型自助組織を特徴づけるものとして、メンバーの構成があげられる。まず男女比であるが、北米の自助組織（*Alcoholics Anonymous*）において男性が占める割合が67%である。これに対して断酒会において男

性が占める割合は91.8%であった。いずれも10年以上の断酒を続行しているメンバーである。さらに北米の自助組織に比べると断酒会は60代以上の会員が占める割合が大きく上回った。AAにおける60歳以上のメンバーの割合が2割未満であるのに対して断酒会は60歳以上の会員が5割を超える。特に2割が70歳以上の会員であることがわかった。このことから断酒会が地域の高齢者コミュニティに何らかの役割を果たしていることが考えられる。2013年8月に大分県で行った調査結果の一部を紹介したい。回答者の約半数が「高齢化社会における断酒会の役割」として「高齢者の居場所をつくる」「高齢者を孤独から救う」と回答した。さらに各地の断酒会員の多くが「飲酒に関する教育を受けた」のは、家庭でも、学校でもなく、断酒会であると答えた。このことは、家庭や学校で行われている従来の飲酒に関する教育が、社会の実態に即したのではないということを示すものであると考える。最後に「断酒会は自殺予防に役立つ」と答えたものが9割を超えたことも紹介したい。研究代表者が2002年から行ってきた調査では大学生の9割が断酒会をはじめ日本の自助組織について聞いたことがないと答える一方で、断酒会に関する情報を得て、参加を続けている方々の多くが「自殺予防に役立つ」コミュニティを活用していることはより広く社会に発信されるべきである。

以上にあげたような研究成果については、国際学会での発表（3件）に加えて、調査・資料収集のために訪れた地域社会においての講演という形で還元する機会を得た。主な講演として以下をあげる。

「社会問題としての飲酒」、NPO法人札幌連合断酒会秋の連合例会及び研修会、
2014年11月1日

「暮らしの中のアルコール関連問題」第5回あさひかわ地酒フェア2014 特別講演会、2014年10月23日

「断酒会と社会をつなぐ家族の役割」、全日本断酒連盟第51回全国(釧路)大会 家族の集い、2014年10月4日

「社会問題としての飲酒」、一般社団法人大分県断酒連合会 市民公開セミナー、2013年8月4日

「飲酒関連問題について考える」、五島市健康推進員研修会(五島市健康政策課)、2013年6月7日

「社会問題としての飲酒」、五島市健康推進員自主活動 講演会(奈留町)、2013年3月22日

「断酒会にたどりついたあなたへ」、第47回 全日本断酒連盟 四国ブロック(香川)大会(於 サンポートホール高松)、2012年4月22日

別研究課題のもとではあるが、研究代表者による編集により、2013年10月に刊行となった『お酒を手にした未成年のあなたへ 断酒会会員と家族からの手紙』も本研究課題への取り組みに寄与したといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

眞崎 睦子、なぜ大学生の飲酒死亡事故はなくなるのか 日本の大学における「静かな強要」と飲酒関連問題対策、メディア・コミュニケーション研究(65)、2013年11月、47-60(査読無)

眞崎 睦子、日本型自助組織「断酒会」の誕生とその役割、北海道大学大学院教育学研究院紀要(119)、2013年12月、167-176(査読無)

〔学会発表〕(計 3 件)

Mutsuko Masaki, On the Transformation of *Danshukai*, a Self-help Group in Japan, Ninth International Conference on Interdisciplinary Social Sciences (The University of British Columbia, Vancouver, Canada), 2014年6月11日

Mutsuko Masaki, On the Role of *Danshukai*: A Self-help Group in Japan's Aging Society, Third Aging and Society: An Interdisciplinary Conference, (Chicago University Center, Chicago, USA), 2013年11月8日

Mutsuko Masaki, What Is *Danshukai*? On "Japanese Alcoholics Not Anonymous", Twelfth International Diversity in Organizations, Communities and Nations Conference (The University of British Columbia, Vancouver, Canada), 2012年6月11日

〔図書〕(計 1 件)

眞崎睦子、中西出版、『お酒を手にした未成年のあなたへ 断酒会会員と家族からの手紙』、2013、63

〔その他〕

ホームページ

眞崎睦子、『お酒を手にした未成年のあなたへ 断酒会会員と家族からの手紙』

<http://hdl.handle.net/2115/54716>

(北海道大学学術成果コレクション HUSCAP)

6. 研究組織

(1)研究代表者

眞崎 睦子 (MASAKI, Mutsuko)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授

研究者番号: 40374631